World View アジア発

シリーズ「アジアほっつき歩る記」第70回

タイ中部を横断してみると

須賀（すが）　努（つとむ）
コラムニスト・アジアンウオッチャー

最近は１年に一度、タイを当てもなく旅している（過去の旅は日経研月報2016年10月号、2017年10月号ご参照）。タイに限ったことではないが、大都市バンコックへの一極集中がどんどん進み、地域格差が広がっていると耳にすることが多いので、それ以外の地域はどうなっているのかについて知りたくなると、フラッとバスに乗って出掛けていく。そんな旅から見えてきたタイの実態をご紹介したい。

電車は遅れない

以前、バンコックからラオス国境の街、ノンカーイまで列車に乗った時には、４時間も遅れて到着した苦い思い出がある。それ以来、タイの鉄道は時間通り走らないと思い込んでいた。実際、バンコックから出発する列車に遅れが多いこともあり、基本的にローカル旅ではバスを使うことにしていた。

今回、東部の街、シーサケットを通りかかると、線路横の市場に庶民の生活が感じられたので、興味を持ち、列車に乗ってみることにした。シーサケットはラオス国境の街、ウボンラチャタニーからすぐの場所にあり、列車はほぼ遅れずに走っていた。基本的にタイでの列車が恒常的に遅れている訳ではなく、特にバンコック周辺の複雑な路線の影響で混雑がひどいためであることをようやく理解した。ローイエットという田舎街では、線路の高架作業が進み、駅も新設されるなど、さまざまな改善がなされている様子がみられ、東部タイでは鉄道が街の中心になっていることが分かった。これはタイ全体からみれば珍しい。

写真１　のどかな三等車の車内

シーサケットからスリンという街まで列車に乗った。三等車は空いていたが全てが座席指定で、１時間半の旅が僅か25バーツ（約80円）という安さだ。そこへ一人の老婆が乗ってきたのだが、その荷物の多さには驚いた。米袋が３つはあっただろうか。誰かが手伝って列車までは上げてくれたが、そこから彼女は一人で袋を１つ１つ引き摺っていたため、それを見かねて車掌を中心に何人もの男女が手伝い始めた。

これが日本だったら『こんな老人に一人で重たい荷物を持たせるなんて、迷惑な話だ。家族の責任だ』と言い出しかねない事態だが、タイではそんなことを言う人間は一人もいない。目の前の事態に対して自分ができることをする、『徳を積む』という教え、『困った人を助けるのはその人のためではなく自分のため』、それがタイのいい所だろう。ローカル列車に乗ったことで、久しぶりにタイの人情に触れることができた。

華人の存在感が目につく

今回訪ねたコーンケン、シーサケットなどでは、街の規模がそれほど大きくないせいか、漢字の看板が目に付き、この地に根付いた華人の多さが感じられた。特に、東北タイからバンコック、アユタヤ方

撮影：佐渡多真子

【須賀努氏のプロフィール】
東京外語大中国語科卒。
金融機関で上海留学、台湾２年、香港通算９年、北京同５年の駐在を経験。
現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

面への交通の要所であるコラート（ナコーンラチャシーマー）、その街の中心部には、宝石屋、薬局、時計屋などが異常に多くみられ、華人の商売が盛んであった様子がうかがえる。

小さな駅でも、駅前のいい場所はほぼ華人が押さえて商売をしている。何十年、何百年前に故郷を出て、ここまで辿り着き、生き抜いてきた華人たちの逞しさが感じ取れる。そして、同時にあちこちに漢字で書かれた華人学校の看板を見つけることもでき、子孫への教育の重要性も十分に認識していることがわかる。この辺りの華人はラオス側からやってきたのだろうか。

バンコックではヤワラー（中華街）などの一部を除くと、華人の存在が表面的には薄れてきている（敢えて薄めている？）が、地方都市にいけば、改めて、タイという国における華人の影響力の大きさを感じられる。特に、経済の分野においては華人抜きには語れないことがはっきりと認識できる。

街の改装は進むが

バンコックに比べて地方都市の物価は安い。屋台の麺レベルでも、一部の観光地を除いては、バンコクより２～３割は安い。日本食なども食べてみたが、バンコックより質的には劣るものの、価格的には随分と安く感じられた。もちろん、ホテルも１泊1,200バーツ（約4,000円）も出せば、かなりいい所に泊まれるケースが多くあり、バンコックの半値ぐらいの感覚である。やはり、よく言われる『タイはバンコック一極集中』はその通りのようだ。

ただ、その地方都市にもバンコックと同様のショッピングモールが建設されてきている。メーソットのロビンソンやコラートのターミナル21など、バンコックでみられるようなテナントが価格も商品もほぼ同じ内容で進出してきている。コラートにはバンコックとの間に新幹線計画があり、そのために土地が値上がりしたという話も聞かれる。その影響もあるのだろうか。

街中に昔からあった小さな食堂や喫茶室が徐々に姿を消し、きれいな外観、内装のカフェなどが増えてきているのは、最近どの都市にも起こっている傾向だろう。これは親から子への世代交代であり、若者は彼らなりに未来に向けて出発しようとしているのだろう。ただ残念ながら、同じようなカフェが乱立し、どこもお客が多いようにはみえなかった。何となくバンコックを模倣して、見掛けだけをよくして料金を上げても、はたしてお客が付いてくるのだろうか、と他人ごとながら心配になってしまう。

数年前、前政権が最低賃金を大幅アップ（１日180バーツから300バーツへ）し、地方都市での賃金改善が期待されたが、現実はどうだろうか。一方で、ミャンマーやカンボジアから安い労働力が流れ込み、地方都市におけるタイ人の職が奪われ続けている、との声も耳にした。今回、タイ中部を横断してみて感じたことは、『タイは１つではない』ということであり、以前よりは生活も向上しているものの、バンコックとの格差はやはり広がってきているのではないだろうか。

写真２　コラートのショッピングモール